OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学部留学生を対象とした「日本語作文」クラスの実践：テキスト分析タスクと感想ラベル・P&Rチャートを用いて
Author(s)	柴田, 幸子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2011, 15, p. 77-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50721
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学部留学生を対象とした「日本語作文」クラスの実践

― テキスト分析タスクと感想ラベル・P＆Rチャートを用いて ―

柴田　幸子*

要　旨

本稿では、学部留学生向けの日本語授業で新たに取り組んだ実践の報告を行う。テキスト分析タスクが学部留学生の文章構成や論理展開に注意を払うきっかけとなったこと、また感想ラベルおよびP＆Rチャートが学部留学生の自己の学びを評価する道具となりうることを述べる。

【キーワード】テキスト分析タスク、感想ラベル、P＆Rチャート、論文構造スキーマ、自己評価力

1　はじめに

筆者は関西の大学で学部留学生向けの日本語授業を担当してきた。その経験を通して、学部留学生向けの日本語授業では、日本語力の向上はもちろんのこと、それと同時に林（2002）の言う“学ぶ姿勢を育むこと”が大切なのではないかと考えるようになった。日本語の授業である以上、大学生活で必要となる日本語（アカデミック・ジャパニーズ）力を育むことが主眼となるが、同時にそれを支える力も育む必要があると考えるようになったのである。

そのためには、どのような授業方法が考えられるのだろうか。本稿では、先に述べた問題意識を持った上で筆者が用いたテキスト分析タスクと感想ラベル、P&Rチャートの実践について報告し、その影響について分析を行う。

2　学部留学生対象とした日本語授業の概要

2-1　受講生の特徴

筆者はS大学の学部留学生向け日本語授業を3年間担当した経験から、S大学の学部留学生の特徴を次のようにとらえている。1）ほぼ大半を中国人留学生が占め、それ以外も韓国などアジア系留学生のみである、2）勉強体験は、高校までの受験勉強を中心とした知識詰め込み、暗記重視が主であり、3）教師からの教授による受け身的な学習スタイルに慣れている、4）授業中に意見を求めても、活発な議論に発展しにくい、また、5）提出される文章も一般的な見解に留まり、学生自身のオリジナルな意見が少ない、6）剽窃に対する意識が薄い者もいる、7）学費・生活費のために長時間アルバイトをしている者が多く、授業外での学習時間が少ない。また授業中も集中力に欠ける者がいる。

特に3）～6）に関しては、大学において学習および研究を進めていく際に一般的に必要であると考えられるもの、つまり能動的な学習スタイルや議論をする力、オリジナルな意見、適切な引用の仕方などの不足を示すもので、今後彼らが大学で学習を進めていく際に問題となってくると考えられた。これらについては学部留学生が所属する学部の教員からも問題点として指摘されており、日本語の授業においても大学生として必要な力を身につけさせるような授業を行うことが望まれている。

2-2　授業の概略

以上のような学生の特徴を考慮し、授業ではアカデミック・ジャパニーズを身につけると共に、“学

* 大阪大学国際教育交流センター非常勤講師

ぶ姿勢を育む”ことを目標として授業設計をすることとした。

当該授業は、日本語の作文能力の向上を目指して開講されているため、アカデミック・ジャパニーズの中でも作文能力を対象とする。そこで、大学で求められる論理的な文章の書き方を学べるものとしたいと考えた。また2-1で述べた学生の特徴から、学生の議論を喚起するものであること、学生自身のオリジナルな意見の芽生えを促すものであることを目指したいと考えた。

3 感想ラベル・P＆Rチャートとテキスト分析タスク

3-1 “学ぶ姿勢を育む”仕掛けとしての感想ラベルとP＆Rチャート

“学ぶ姿勢を育む”仕掛けとして筆者が取り入れたのが、林（2002）の行った感想ラベルとP＆Rチャートである。

感想ラベルとは、毎授業終了時に学生にその授業の感想をラベルに書いて提出させるものを指す。林（2002）は、そのサイズに配慮し、気軽で、いざ書こうとすると要約が必要で、しかも言いたいことはほぼ書ける紙面が適当であると述べている。感想ラベルを提出した後、次の回の授業では最初に何人かのラベルが読み上げられ、教師からそれに対するコメントが出される。このコメントは、学生への刺激となり、次回のラベル書きへの意欲付けを目的としている。

この感想ラベルの意義として、林（2002）は教師に対するフィードバックのための発信、授業を巡っての情報を交換するというクラス仲間への発信、自分自身のために今日の学びのエッセンスを集約して文章表現して足跡として記す、つまり、将来そのラベルを読むときに自分自身に向けての発信となることをあげている。さらに授業を教師と学生の共同的な社会行為とするなら、報告しフィードバックするのは権利であり、義務であり、礼儀であり、感想ラベルはその報告の役割を果たすと述べている。

P＆Rチャートとは、学生が自分の学びを振り返るために作成した図解（チャート）である。このP＆Rチャートは、感想ラベルを一定期間おいて、その後まとめて返却し、それを用いて作成させる。林（2002）は、P＆Rチャートの作成を通して、自己の学びの経過（過程・プロセス）と成果（結果・リザルツ）を自覚的にとらえ直すことができるとしている。

また、このP＆Rチャートの意義については、次のように述べている。現在の大学教育の課題は、学ぶ姿勢を育むこと、つまり、「自ら学ぶ力」の育成をすることである。「自ら学ぶ力」の中核となるものは、自己評価力すなわち自分で自分の学びを評価する力である。この自己評価力とはつまり自分が学んでいるかどうか、自分が学習によって成長しているかどうかに気を配り、それを判断できる力である。P＆Rチャートにより学生達は自分の学びに直面せざるを得ず、学生達を自分の学びに直面させることがP＆Rチャートの意義であると述べている。

この林（2002）が大学教育の場で必要であると指摘する自己評価力を育むことは、同様に大学教育の場に身を置く筆者にとっても担当する学部留学生に必要な力であると考えられた。このため、授業でこの手法を取り入れることとした。

3-2 テキスト分析タスクのねらい

「テキスト分析タスク」とは、因他（2008）が用いた、「論文構造スキーマ」を形成・活性化するためのタスクである。因他(2008)は、「論文構造スキーマ」とは研究成果を公表する論文の文章がどうあるべきかの知識の総体であるとしている。また、研究留学生が論文等の文章を作成する際に抱える問題点は、①言語知識不足から起こる問題と②研究成果としての学術論文のスキーマの欠如に起因する文章構成や論理展開の問題であると指摘している。後者は、文末モダリティー表現の不適切性、文や段落間の論理的関係性の表示の欠落、学術的論述に必須の厳密さの不足、文章全体の一貫性の欠如などであり、これらの問題の解消には新たな学習技能を獲得させ、スキーマを形成・活性化することが必要であると述べ、そのためのタスクとして「テキスト分

析タスク」の有用性を指摘している。ここで指摘される後者の問題点は、そのまま筆者の担当する学部留学生にも当てはまる問題であると考えられた。

さらに、因他（2008）は「テキスト分析タスク」実践例を紹介している。まず『大学・大学院留学生の日本語２：作文編』（アカデミックジャパニーズ研究会編、2001、アルク）を用いて表現や構成を学習した後、同テキストにある400～600字の作文課題を提出させる。この作文課題では、基本的に3段落構成で各段落の内容の枠組み（現状の説明、問題の分析、意見）が示されている。

次の授業時には、「共同添削タスク」を行う。「共同添削タスク」とは、提出された作文の一部から教師が200字～300字程度の段落ごとに抜粋して文法や表記の誤用に限ってほぼ修正した上で編集したもの（模範例や問題のある例）を用い、受講者が皆で学術的論述としての適切性の観点から構成や論理展開を自由に検討しあう活動を指す。このタスクの間、教師は受講者の意見集約に努め、受講者の質問は可能な限り他の受講者に検討させる。タスクの目標は、他者が書いた文章例から学ぶという学習ストラテジーの獲得と批判的に読む視点の獲得である。

その後、教師が添削した各自の作文を返却し、受講者自身で再検討し、修正版を提出する。教師はその間、個別の質問に対応する。これらの活動を何回か行った後の最終授業では、自己変化の認識を意図し、学期当初の未添削の作文を受講者自身に添削させるというものである。

因他（2008）は、このタスクの効果を測るために、自由記述によるアンケート調査と聞き取り調査を行っている。そしてその効果について、論文として適切な構造を持つ文章を高く評価できた者の割合が高く、漢字語彙等の局所的問題を重要だと考え、平易さを優先してしまった者の割合が低かったことを明らかにした。また、授業参加者全員に自己の変化や日本語学習目標についての積極的で明確な意識が観察されたことも指摘している。

テキスト分析タスクの効果として指摘された論文として適切な構造を持つ文章を高く評価できる能力は、筆者が担当する学部留学生にも必要な能力であると考えられた。また、同タスクによって引き起こされた自己変化や日本語学習についての積極的で明確な意識も同様に必要であると考えられた。さらに、同タスクの活動として行われる授業参加者による自由な検討活動も、学生の議論を喚起する装置として有用なのではないかと考えられた。また、それらの議論を契機として個々の学生に自身の意見が芽生える可能性もあると考えられた。そこで、筆者はこの「テキスト分析タスク」を授業にて取り上げることとした。

4　感想ラベル・Ｐ＆Ｒチャートとテキスト分析タスクによる効果

授業は、先に紹介した林（2002）と因他（2008）の方法を踏襲して行った。本稿では、テキスト分析タスクを行った授業後に記入された感想ラベルとＰ＆Ｒチャートに表れた実践の効果について報告したい。感想ラベルは先に述べたように書くスペースが制限されている。このため、学生にとってその授業時の感想の中で最も述べたい感想が書かれていると考えられる。

4-1　文章構成や論理展開の問題への効果

先に、「テキスト分析タスク」は研究成果としての学術論文のスキーマの欠如に起因する文章構成や論理展開の問題の解決に有用であると述べたが、学部留学生の感想ラベルのコメントにもその効果が見られた。例えば、「なかなか筆者の一番言いたいことがつかまれないこと」（留学生A）「普通読める文章の意味がわかると思ったけど、今回の授業内容を通して、以前読んだ文章の本当の意味は実はわかっていないことに気づいた」（留学生G）などは、文章全体を貫く筆者の主張への気づきを示していると考えられる。前者のコメントからは、筆者の主張をつかむことの必要性を理解した上で、自分がまだその主張を上手く掴むことができないことに対するもどかしさを持っていることがわかる。この筆者の主張を掴むことは、大学で論理的な文章

を読んでいく際に大切な力であり、大学生が身につける必要がある力であろう。このコメントを書いた学部留学生は、今回のタスクによって筆者の主張を掴む大切さとそれができないもどかしさをおぼえたが故に、今後、筆者の主張を掴むことに取り組んでいくと考えられる。また、後者のコメントには、「文章の本当の意味」という言葉が見られる。S大学の学部留学生の多くは、日本語学校で日本語を学習してからS大学に入学してくる。日本語学校等では、逐語訳による文章理解を行ってきた者が多い。逐語訳する力も大切な力であるが、ともすると一文一文の理解に留まり、文章全体の主張の理解に至らない学生も多い。後者のコメントには、逐語訳による理解ではなく文章全体を貫く筆者の主張を掴むことへの気づきを示していると考えられる。この気づきを得たことにより、後者のラベルを書いた学部留学生も、筆者の主張を掴むという作業に取り組み始めると考えらえる。

また、P＆Rチャートによる振り返り時には、「文章の構成がきっかけで、文章を書くときの呼応に注意し始めた」（留学生B）という記述が見られ、文と文、あるいは段落と段落の「つながり」に対する気づきが観察できる。文と文、あるいは段落と段落のつながりを意識して書くことは論理的な文章を書く上で大切なことである。このチャートを作成した学部留学生は、文と文、あるいは段落と段落のつながりを意識して書く必要性を理解し、自身が文章を書くときに注意し始めたことを記している。

このように感想ラベルやP＆Rチャートを作成することは、学部留学生が自らの学びを記し、自身の次の学習課題を記述する作業であることがわかる。林（2002）が感想ラベル・P＆Rチャートの意義であると述べた、学生自らの学びを評価することが、本授業中にも為されたことを示している。

また、P＆Rチャートには「文章はただ書くことではないということ」（留学生B）という表現があり、構成や内容を意識して書くことへの気づきが示されている。この記述からはこの学生が、それまでの自分が「ただ書いて」いたことに気がつき、論理的な文章は「ただ書く」のではダメなのだと気づいたことがわかる。

さらに、P＆Rチャートには「文章の仕組み、中心文の後に支持文があれば、文章の説得力が高まる」（留学生I）という表現も見られた。これは、論理的に書くことの効果への気づきを示していると考えられる。テキスト分析タスクで使用したテキストは、論理的な文章の書き方を示しているが、その効果については記述しておらず、筆者も授業中にその効果を言及したわけではない。しかし、このチャートを作成した留学生は、文章の説得力を高める効果があると記している。これは、タスク活動を通して留学生自らがその効果を掴みとったことを示しているだろう。学生にはこのように、全てを講義等で説明しなくても、状況さえ整えれば自ら掴みとる力があると考えられる。

また、P＆Rチャートには「支持文や中心文を勉強し、作文の流れを学んで、だんだん自信が高まっていった。」（留学生E）という記述もあり、上記のような気づきが学生の自信につながっていることも見てとれた。この自信が、学生の次の学習につながっていくと考えられる。

以上のように、テキスト分析タスクを用いることで因他（2008）が述べたテキスト分析タスクの効用である論文スキーマの形成が、S大学の学部留学生にも生じたことがわかった。また、この論文スキーマの形成により、学部留学生らの文章構成や論理構成の問題が解消される、あるいは解消される方向に今後向かっていくだろうことが観察できた。

さらに感想ラベルやP＆Rチャートを分析すると、テキスト分析タスクによる別の効果も示されている。それについては、以下で述べていきたい。

4-2　他者の作文の検討による効果

感想ラベルには「他人の作文の間違ったことを探すとき、実は自分で作文するときいつもまちがっていたところもわかった」（留学生H）という記述が見られ、他者の作文を検討することが自身の作文への検討につながっていることが示されている。他者が書いた文章でも、印刷された文章には間違いは（ほぼ）ないだろう。しかし、同じ他者であっても

クラスメートの書いた作文には間違いも含まれている。この他者による間違いが、学習の契機となっていることを上記の感想ラベルのコメントは示しているといえよう。

また、P＆Rチャートには、「自分の考えたものを書くだけではなく、他人はどんな風に書いているかも分析すること。そのような方法、私が一番習ってたことだと思う」（留学生C）「作文、レポートはどう書けばいいのかということを勉強した。それだけではなく、評点することもした。他の人の作文の良い点と悪い点をみんなと一緒に討論したりして、とても役に立つと思う」（留学生J）「自分で作文を書き、そして、他人の作文を読み、いいところや間違ったところを探し、そうすれば自分の読解能力も書く能力も高くなった」（留学生G）という記述があった。これらは、他者の作文を検討するという作業に個々の学生が意義を見出していることを示すものであろう。他者の文章を検討することは、ゼミ活動を始めとする大学の学習で必ず必要になってくる作業である。先にS大学の学部留学生の特徴として、受身的学習に慣れている者が多いと述べたが、このため、ともすれば答えのみを知りたがる学生も多い。今回のテキスト分析タスク時の作文の検討作業でも当初は早く答えを教えてほしいという様子が見てとれた。しかし、最後の授業でのP＆Rチャート作成時には上記のような記述が見られ、各自が意義付けを行っていることがわかった。このような学習に自ら意義付けを見出していく力も大学生にとって必要な力といえるのではないだろうか。

さらに感想ラベルには、「クラスメートの作文を見ているとき、彼達の想い方や考え方などがわかっているが、なんか、中国語から日本語に訳した文章はときどき変な感じがした。どうすればよいか」という記述も見られた。このラベルを書いた学部留学生は、中国人であるが故に、クラスメートが書いた中国語から日本語にそのまま訳した文章に生じる奇異に気がつき、違和感のない日本語で表現するためにどうしたらよいのかということに関心を持つようになったと考えられる。この学生は、今後、違和感のない日本語で表現する方法を模索していくと考えられる。

4-3　その他の効果

感想ラベルには、その他に「日常知識が足りないのは、今日の作文題目からわかった。やはり大学生だから、色々な面でも予備知識がないと進歩できないから、これからもっと勉強しよう」（留学生C）「日本語の問題じゃなく、社会常識に関する知識が足りないということが気がついた」（留学生J）「話題になっていることは、自分の意見を持つのは大切だと思う」（留学生A）という記述も見られ、大学生として一般的な教養を身につけることや自分自身の意見を持つことの必要性への自覚が垣間見れる。このような効果はテキスト分析タスクの調査を行った因他（2008）では言及されていない。テキスト分析タスクによる効果というより、作文課題の効果と呼ぶべきものであろう。しかし、この度の授業の効果として記述しておきたい。

またP＆Rチャートには、「以前私は自分の作文が良くないと思ったけれど、ある日誰かが私の作文の中でいい所を言ってくれて、とてもありがたいと思った。」（留学生E）「毎回自分が書いた作文のミスを他人に探されると、次回もっと頑張ろうと思ったことが心に残っている」（留学生G）といった記述も見られ、作文検討時の他者からのコメントにより、自信を得たり、やる気を喚起されている様子がうかがえた。日本語学校で1，2年日本語を学習しただけで入学してくる学部留学生にとって、大学での学習は難しく戸惑いも多いようである。今回のテキスト分析タスクにより、自信を得たり、新たな動機付けを獲得できたことは、学部留学生達の今後の学習の牽引力となるのではないだろうか。

5　まとめ

本稿ではS大学における学部留学生の「日本語作文」クラスでの感想ラベル・P＆Rチャートおよびテキスト分析タスクを用いた取り組みによって、学部留学生が文章構成や論理的展開に対して注意を払っている様子を報告した。筆者は、この

様子を学部留学生自身が記述した感想ラベルやＰ＆Ｒチャートに拠って示した。感想ラベルやＰ＆Ｒチャートの記述は、本稿で先に述べたように学生自身が記述するが故に学生が自覚した学びの記述であると考えられる。感想ラベルやＰ＆Ｒチャートの記述から、今回の授業参加者である学部留学生が、様々な学びを自覚していることがわかった。また同ラベルやチャートには、その学びの自覚により新たに自らに課題を課し、学習を進めていこうとしている気持ちも記述されていた。この学びの記述、今後の課題の記述は、林（2002）のいう自己評価が記述されたものと言えよう。このため、本稿では学部留学生が自ら学びを評価している姿を示すことができたと思う。

大学での学習は、日本人学生でもそれまでの高校までの学習体験とは異なることが多いため、戸惑いが見られる。学部留学生はそれに加えて、日本語の問題がある。日本語の問題とは単に言葉の問題というだけでなく、日本語の文章が持つ特徴をも含んでいる。学部留学生は日本語を母語としないので、それらは身近なものではなく、まずそれらに気づくことから始めなければならない者が大半であろう。その意味で、今回採用したテキスト分析タスクは、学部留学生らに気づきを促すことができ、有用であったと考える。

また、学生達はテキスト分析タスクの中で行った他者の作文を検討する、つまり議論をするという体験を通して、自分の作文への新たな気づきや他者にほめられることによる自信の形成、他者に欠点を指摘されたくないから頑張るといった新たな動機付けを得ている。学部留学生達は、これらの認識を得ることにより、他者と議論することを通して学びを深めるという、大学での学習の一側面にも気づくことができたのではないだろうか。

大学院留学生と異なり、母国で大学での学習や研究活動をしておらず、能動的に学習する経験をしていない学部留学生には、日本の大学で求められる能動的な学習姿勢は、戸惑いを生じさせる。日本語の授業である以上、日本語を教えることは当然のことであるが、大学教育に携わる者として、日本語を教えるだけでは不十分であろう。学部留学生が、大学での学習および研究を進めることができ、その成果をもって卒業できることを主眼において授業を行っていく必要があるのではないだろうか。そのためには、大学での学習および研究を滞りなく進めていくことができる力を身につけられるような授業設計をすることが必要となるだろう。今回の報告では、学部留学生が大学での学習および研究を滞りなく進めていくために必要な力に気づき、今後それらを身につけていこうと努めるであろう萌芽を記すことができたと考える。今回用いたテキスト分析タスクと感想ラベル、Ｐ＆Ｒチャートという手法は、上記のような目的を持って授業を行う際に有効な手法となりうるといえるのではないだろうか。

参考文献

アカデミックジャパニーズ研究会（2001）『大学・大学院留学生の日本語：作文編』アルク

因京子、村岡貴子、仁科喜久子、米田由喜代（2008）「日本語テキスト分析タスクの論文構造スキーマ形成誘導効果」『専門日本語教育研究第10号』pp.29-34

林美樹（2002）『参画教育と参画理論―人間らしい『まなび』と『くらし』の探求―』学文社

村岡貴子、因京子、仁科喜久子「専門文章作成支援方法の開発に向けて：スキーマ形成を中心に」『専門日本語教育研究第11号』pp.23-30